

[成果情報名]分離離乳は子豚生産性を妨げず繁殖雌豚の授乳負担を軽減できる

[要約]分娩後16日で大きく育った子豚5頭を先に離乳し、分娩後21日後に残りの子豚を離乳する分離離乳を取り入れることで、子豚の生産性を妨げず、哺乳頭数を減らすことにより繁殖雌豚の授乳負担が少なく、長期に供用できる可能性がある。

[キーワード]分離離乳

[担当]三重畜研・中小家畜研究課

[代表連絡先]電話 0598-42-2029 E-mail : ichikt02@pref.mie.lg.jp

[区分]関東東海北陸農業・畜産草地(中小家畜)

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

近年繁殖雌豚の産子数増加や哺育能力の向上に対応した子豚の哺育技術が望まれているが、繁殖雌豚の哺乳ストレスを軽減するために早期離乳は有効な技術といわれている。

本研究では「アニマルウェルフェアの考え方に対応した豚の飼養管理指針」において、子豚の早期離乳(分娩後3週齢以内)を行うには必要な設備及び技術を習得した者が実施することを推奨していることから、特別な施設や技術を必要とせず分離離乳を行うことにより、子豚の授乳競争軽減や繁殖雌豚の授乳負担軽減を図り、子豚の成長や繁殖雌豚の繁殖成績の維持を目指したものである。

[成果の内容・特徴]

1. LW 交雑種雌の繁殖雌豚を分娩前に分娩豚房で1頭ずつ飼養し分娩させ、配合飼料を制限給餌、自由飲水とする。生まれた子豚は分娩豚房、離乳豚房で群飼養、市販の人工乳を生後5日から餌付けを開始して不断給餌、自由飲水とする。
2. 繁殖雌豚1頭当たりの子豚育成成績では分離離乳と慣行離乳に差はみられない(表1)。
3. 子豚1頭当たりの育成成績では、21日齢から35日齢までの増加体重で慣行離乳が分離離乳に比べ体重が増える(表2)。
4. 分離離乳で早期に離乳した子豚も体が大きいため順調に成長する(図1)。
5. 分離離乳と慣行離乳の出荷日齢は156.6日、159.0日、出荷体重は112.3kg、113.6kg、出荷までの1日増体重は0.720kg、0.717kgと差は見られない(各53頭、データ省略)。
6. 繁殖雌豚の発情回帰日数は分離離乳と慣行離乳に差はみられない(表3)。
7. 分離離乳と慣行離乳ともに哺乳中や離乳後に子豚の下痢は見られない。

[成果の活用面・留意点]

1. 産子が多い場合、分離離乳を取り入れることで、特別な施設や技術を必要とせず繁殖雌豚の哺乳頭数を減らすことができる
2. 繁殖雌豚の発情回帰日数は慣行離乳で1頭発情が遅れたため19日であったが、その1頭を除けば良好である。

[具体的データ]

表1 繁殖雌豚1頭あたりの子豚育成成績(単位:kg)

処理	分娩頭数	分娩体重(a)	21日齢	35日齢	増加体重	
			体重(b)	体重(c)	c-b	c-a
分離離乳	13.3	21.3	78.5	141.6	63.1	120.3
慣行離乳	13.3	23.4	82.1	160	77.8	136.5
P値	1	0.32	0.65	0.18	0.12	0.22

分離離乳は分娩後16日で体重の大きい子豚5頭を離乳、残り頭数を分娩後21日に離乳し、慣行離乳は全頭分娩後21日で離乳する。供試数：各区4頭1反復

表2 子豚1頭当たりの育成成績(単位:kg)

処理	分娩体重(a)	21日齢	35日齢	増加体重		
		体重(b)	体重(c)	c-b	c-a	1日増体重
分離離乳	1.6	6	10.8	4.7	9.1	0.261
慣行離乳	1.8	6.2	12.2	5.9	10.4	0.296
P値	0.33	0.74	0.10	0.04	0.13	0.13

供試数：各区53頭1反復

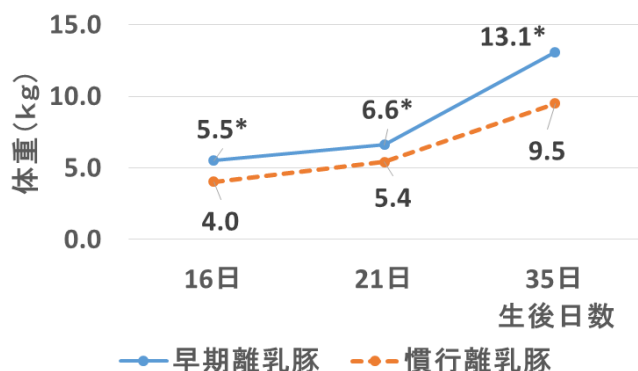


図1 分離離乳の子豚体重

供試数：早期離乳豚20頭、慣行離乳豚33頭1反復

*P<0.01

表3 繁殖雌豚の発情回帰日数

処理	発情回帰日数(日)
分離離乳	4.5
慣行離乳	19.0
P値	0.35

供試数：各区4頭1反復

(市川隆久)

[その他]

研究課題名：アニマルウェルフェアに則した豚の飼養管理技術の検討
—分離離乳を取り入れた飼育管理方法の検討—

予算区分：県単

研究期間：2021～2023年度

研究担当者：市川隆久、黒田克利

発表論文等：